様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2011 年度
課題番号：20520112
研究課題名（和文）　土地の記憶の生成・変容過程に関わる芸術の機能の研究
研究課題名（英文）　A study about the role played by artworks in the process of formation and transformation of the landscape memory
研究代表者
渡辺　裕（WATANABE HIROSHI）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：80167163

研究成果の概要（和文）：
土地に関わる記憶が人々のうちに形作られ、また変容してゆく過程で、その土地に関連する芸術作品がどのように機能し、その際にいかなるメカニズムが作動しているか、それが人々の共同体意識やアイデンティティ意識の形成にどのように関わっているか、といったことを明らかにするため、小樽市(北海道)、軍艦島(長崎県)、東京タワー、日本橋といった事例を取り上げ、それらの場所を舞台とした映画作品などの作品や、その周辺にある言説の分析を行うことを通して、このような過程に関わる諸要素やそれらのおりなす力学の一端を解明し得た。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study is to clarify the process and mechanism concerning formation and transformation of the landscape memory, the role of associated artworks in such a process, and their contribution to the formation of local residents' sense of belonging or identification. For this purpose, I've taken up several particular cases: Otaru city (Hokkaido), Gunkan-jima (or Hashima, Nagasaki prefecture), Tokyo Tower and Nihonbashi (Tokyo). I've analyzed artworks and discourses concerning them: e.g. films having their settings in these places or using them as their locations etc. Through these analyses, I've succeeded to extract several factors concerning such a process and to have a glimpse of the power relations woven by them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：集合的記憶、観光、地域イメージ、コンテンツツーリズム、映画、ロケ地、ジンタ、チンドン、県歌、小樽市、軍艦島、日本橋、昭和ブーム、文化資源学

１．研究開始当初の背景
①フランス歴史学を席巻した『記憶の場』に代表されるように、「記憶」というテーマは、近年の人文系の研究の中で脚光をあびる、ホットなテーマ

である。芸術もまた、そのような「記憶」の生成に関わる重要な存在であり、その過程において芸術の果たす役割を論じることは、今まさに求められていることであるにもかかわらず、これまで十全になされてきたとは言い難かった。
②現在、「地方の時代」などと言われる状況であるにもかかわらず、土地の記憶・表象のあり方や、それに対する芸術の関与といった問題が十分に議論されないまま、「地域おこし」的な活動が盛んになり、きわめて無反省的、無自覚的な形で「地域文化」が語られたり、その土地出身の芸術家やその土地を舞台やロケ地とした作品などが安易に使われたりする状況を眼にすることがしばしばあるため、この問題について、とりわけ芸術研究の側から、きちんと位置づけることの必要性を痛感するにいたった。

２．研究の目的
①土地に関わる記憶が人々のうちに形作られ、また変容してゆく過程で芸術がどのように関与し、その際にいかなるメカニズムが作動しているかを解明し、それが人々の共同体意識やアイデンティティ意識の形成へと結びついてゆくあり方を明らかにすることを目指した。
②芸術家や芸術作品について、その制作活動の場となった、あるいは作品の舞台になった場所との関係は、これまでにもいろいろ論じられてきたが、多くの場合、作家や作品の側に回収される議論に終わってしまい、「場所」はつねに脇役にとどまり、統一的に考察されることはなかった。作品というテクストに対するコンテクストとしての場所という従来の捉え方を、本研究では逆転させ、場所というテクストを読み解くためのコンテクストとして作家や作品を考える、というこれまでにないアプローチを試みた。

３．研究の方法
①とりあえずの出発点としては、土地の記憶や表象の生成・変容過程に芸術作品が端的に関わっている事例として、文学散歩、ロケ地巡りといった事象をとりあげ、これらのふるまいの中で、作品体験を通して形成される土地の表象が現実の土地に転写され、その土地の記憶の中に根付いてゆく過程、とりわけ近年の「街おこし」的なコンテクストと結びつく中で、それが現実の街づくりや街並み保存などの営みに結びついてゆく過程を解明することを目指した。
②本研究は当初、土地の表象に関わる様々な立場の人々、とりわけ、その土地に居住する人々と、観光客など「中央」からのまなざしを向ける人々の意識の「温度差」のありようを、現地調査を含めた具体的な調査によって明らかにし、それぞれの表象の成立過程において、芸術作品の生み出すイメージや、文学散歩、ロケ地めぐりといった活動がどのような役割を果たしているかをあぶり出す手法を念頭においていた。しかしながら、現地の人々の言説を反映した文献などを読み進める過程で、とりわけ「現場」における言説はかなりステレオタイプ化されているきらいがあり、むしろ、そうしたステレオタイプ的な言説を生み出す歴史的コンテクストや文化配置を多面的に分析するやり方の方が有効であることを認識するにいたった。
③そのため、考察対象の範囲も当初の想定よりはかなり広がる結果になった。地元密着型の楽隊としてのジンタの成り立ちや、都道府県歌が地域アイデンティティの核として普及してゆく過程についての研究などは、当初の研究意図からはかなり離れたものにもみえるが、地域表象の問題は、こうした多様なレベルでの文化的コンテクストのおりなす問題として、とりわけ歴史的な背景との関わりの中で考察する必要があると考え、あえて少し引いた位置からの考察を試みた。
④そのこととも関連するが、当初考えていた、文学作品や映画作品などの「芸術作品」に話を限ってしまうと、見えなくなってしまう部分が多いことを認識するにいたったため、「芸術」という限定をあえて捨て、「視覚文化」、「聴覚文化」といった観点から、ドキュメント映像、テレビ番組、ポスター、チラシ、ＣＭソングや駅の発車メロディにいたるまでの多様な感性体験を視野に入れることを心がけ、それらのマルチメディア的な相互作用の所産として土地の表象を捉えてゆくという考え方が前面に出てくることとなった。

４．研究成果
①最初の考察対象であった北海道小樽市については、全国的にみてもロケ地巡りの最初期の例となった映画《Love Letter》(1995) と、NHK 札幌局制作のテレビドラマ《雪あかりの街》(2007) という二つの事例を考察したが、前者においては近年、その中心的なロケ地として用いられた昭和初期の住宅坂邸（1927、田上義也設計、2007 年焼失）を軸とした小樽市のモダンイメージに沿う形で、近年の小樽のまちづくりが行われるようになってきていること、その際に、小樽という街のアイデンティティの枠組み自体が映画での設定に沿う形で再編成される形になっていることを示した。後者は小樽の地場産業であるガラス工房を舞台に、華やかな観光用の工芸品製作を尻目に、地味な漁業用の浮き球製作に没頭する頑固な職人の姿を描いているが、ロケ地として使われた、休業状態にあった漁業用浮き球を製作する工房が、このドラマの制作と並行する形で、若い経営者のもとに新たな展開をみせるようになった経過やそこに関わる諸要因を明らかにしえた。いずれのケースにおいても、ドラマにおける設定やストーリー内容、そこで提供されるイメージが現実の街のありようを作り出したと言っても過言ではないくらいに大きな影響を行使したことが示された。その一方で、ここでの展開には、1970 年代からの、小樽運河埋め立て反対運動や近代建築の保存、街並み保存、といった動き、小樽におけるガラス工芸が、観光化の中で脚光を浴びてゆく過程などの歴史的経緯や背景的状況が、切っても切れない形で関わって

おり、映画やドラマの表現も、それらを総合的に考察し、こうしたコンテクストの上に置いてみたときにはじめて十全な意味をもって立ち現れてくることを示し得た。上記内容のうち、《Love Letter》のケースに関わる部分だけはすでに論文として発表した。その他の部分についてはまだ公にしていないが、原稿自体はほぼ脱稿しており、他の論考とあわせて、単行本として公刊する準備を進めている。

②続いて対象に定めた長崎県の端島(軍艦島)は、かつて栄えた炭鉱の島が閉山によって一気に無人島となった特異な場所であるが、廃墟趣味の対象として脚光を浴びるようになり、ここ数年、急速に観光地化している。端島をめぐる言説の研究を進めてみると、単に廃墟趣味の対象となったということだけでなく、これまた近年急速に進みつつある産業遺産、近代化遺産という観点からの評価や、かつて島が栄えていた頃の華やかな時代を知る旧島民のノスタルジックな視線、さらには戦前、戦中にあった朝鮮人などの強制労働の舞台になった場所としての忌まわしい記憶など、様々な立場の人々の様々な視線が交錯し、いわばそれらの多様な言説のヘゲモニー争いの場所となっている実情があきらかになってくる。本研究ではそのような状況をふまえ、軍艦島を題材にした様々な写真集やグラフ雑誌記事、軍艦島を舞台やロケ地に使ったいくつかの映画、それにニュース映像などのドキュメンタリーフィルム、近年多く作られている廃墟マニア向けの DVD 映像等を分析した。その結果、それらにおいては、視覚的な画像や映像だけでなく、つけられたキャプション、伴奏につけられた音楽などを駆使したマルチメディア的な効果によって多様なイメージ形成が行われており、それが、それぞれの立場の言説を引き出し、リードする役割を果たしていたことが明らかになった。しかし他方で、同島を舞台とした NHK ドラマ《深く潜れ》(2001) のケースでは、NHK のウェブサイトに作られた掲示板上で、廃墟マニアと旧住民など、異なる立ち位置に立つ人同士が、このドラマについてのやりとりを通じて見方を変えてゆくような場面も見られ、これらの写真や映像が、この島をめぐる多様な言説を媒介し、今までにない新たな方向性を作り出す可能性をも秘めている状況が明らかになった。これについてもまだ公刊していないが、原稿はほぼ脱稿しており、①とともに単行本におさめる予定で準備を進めている。

③土地の表象に関して、研究代表者がかねてから関心をもっていた問題のひとつに、「ノスタルジー」との関わりがある。当初、研究代表者は、ドイツにおける東西統合後に広がっている「オスタルギー（東への郷愁)」現象をとりあげ、近年盛んに作られる、東ドイツ時代のベルリンを舞台にした映画によって作られる「よき時代」的なベルリン表象を通して、東の時代をノスタルジックに顧みる傾向を考察する予定であった。しかし、その後の研究の過程で、日本で現在進行している「昭和ブーム」の中に、それとかなり類似した状況がみられることが明らかになってきたため、そこにおける「東京」の表象のあり方を考察する方が、その背景において、小樽や軍艦島の事例とも直接につながる点が多いことから、そちらの研究を優先的に進めることとした。「昭和ブーム」を象徴する代表的な映画である《ALWAYS 三丁目の夕日》シリーズを事例として、こうした映画がきわめて一面的な東京表象を紡ぎ出してゆくことによって、その時代を実体験した人々だけでなく、体験していない若者や東京以外の住人たちをも「ノスタルジー」の中に巻き込んでゆく、その過程やメカニズムを明らかにすることが課題である。現状ではその全貌を解明し得たとは言い難いが、《ALWAYS 三丁目の夕日》の中で昭和 30 年代の「古き良き東京」の象徴として用いられていた東京タワーと日本橋に関するこの映画の中での表象をとりあげ、これらが同時代には実際にどのような形で表象されていたかを明らかにすることからはじめ、それがこのような一面的な表象へと変容してゆく過程やそのような動きに関与した諸要素をある程度明らかにしえたと考えている。そのうち、日本橋の表象の部分については、すでに論文として発表しており、この問題の背後に、1970ー80 年前後を境とする日本文化全体の大きな変化があったこと、今日の地域表象の原型のかなり大きな部分がこの変化の所産であったことが明らかになった。小樽や軍艦島についても、背景的な状況にはつながりがあり、その連関であらためて捉え返すことが可能であるように思われる。

④同時並行的に行ってきた、一見したところ上記の研究とは全く違う題材を扱っているようにみえる、ジンタの成り立ちや都道府県歌、うたごえ運動をテーマにした研究においても、やはりこの 1970ー80 年前後の時代が日本文化の大きな構造転換期を示すものであることが明らかになってきた。そのことは、「中央」と「地方」との関係や地域表象、地域アイデンティティのあり方をめぐる議論が、そのような転換との関連の中で初めて意味をもちうることを示しているといってよい。そしていずれのケースにおいても、地方文化や地域アイデンティティに関わる問題は一方で、地方だけの問題ではなく、「中央」の動きとの関わりの問題として論じられるべき部分が大きいこと、しかし他方で、これまでの議論がもっぱら「中央」の側の視線からなされてきたために、地方文化を考える上で死角になっていた問題がかなりいろいろあることが、明らかになってきた。本研究では、これらの問題を十分に整理するまでにはいたらなかったが、土地の表象・記憶に対する芸術の関わりにという問題が、個々の作品、個々の地域のレベルにとどまるものではなく、文化のこうした全体的な構造との関連の中で議論すべきものであることを、あらためて認識するにいたった。その意味で、今後のこの種の研究にとっての出発点を提供しうるものとなりえたと考えている。

⑤前項までで述べたように、これらの成果のいくつかはすでに論文として発表しているが、未発表

のものについても、相当部分がすでにほぼ脱稿しており、単行本として出版する手筈を現在整えつつある。また、当初構想していたものの十分に展開せずに終わったドイツの「オスタルギー」、研究過程の最後の段階になって浮上してきた駅の発車メロディといったいくつかのテーマについては、まとまった論文としてではないが、新聞のコラムや一般雑誌におけるエッセイなどの形で、それらの問題を軸とした問題提起を行っており、そのような形で社会発信の責めを果たすことができたことを付け加えておく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 13 件）
①渡辺裕、寮歌の「戦後史」―日本寮歌祭と北大恵迪寮におけるその伝承の文化資源学的考察、美学芸術学研究、査読無、第 27 巻、2008、57-94
②渡辺裕、バナナの叩き売りの口上はいかにして「芸術」になったか、大航海、査読無、第 70 号、2009、86-93
③渡辺裕、レクイエムは音楽？　典礼？、アステイオン、査読無、第 70 号、2009、202-205
④WATANABE Hiroshi, Building the body and mind of Japanese “nationals”: Modern history of “songs (shôka)” in Japan, International Yearbook of Aesthetics, 査読無、Vol.13、2009、189-208
⑤渡辺裕、県歌《信濃の国》にみる「中央」と「地方」、アステイオン、査読無、第 71 号、2009、132-135
⑥渡辺裕、東ドイツの美しい記憶？―「オスタルギー」のなかのベルリン、アステイオン、査読無、第 72 号、2010、184-187
⑦渡辺裕、「ノイズ」言説・再考―ジンタとチンドンをめぐる表象の生成と変容、文学、査読無、第 11 巻 6 号、2010、70-87
⑧渡辺裕、窒息する文化―作品の公共性と著作権の横暴、アステイオン、査読無、第 73 号、2010、174-177
⑨渡辺裕、文化としての「発車メロディ」―「サウンドスケープ」から「聴覚文化」へ、アステイオン、査読無、第 75 号、2011、178-181
⑩渡辺裕、ラジオの文化の「非公式」な担い手たち、アステイオン、査読無、第 76 号、2012、148-151
⑪渡辺裕、映像による都市イメージの生成と変容―映画《Love Letter》と小樽のまちづくり、『日常性の環境美学』（西村清和編、勁草書房）、査読無、2012、252-280
⑫渡辺裕、日本橋と高速道路―都市景観言説にみる美的判断の生成と変容の力学、美学芸術学研究、査読無、第 30 巻、2012、印刷中
⑬WATANABE Hiroshi, Takarazuka and Japanese Modernity, “Music, modernity and locality in prewar Japan: Osaka and beyond”(edited by Arison Tokita and Hugh de Ferranti, Ashgate)、査読無、2012、印刷中

〔学会発表〕（計 2 件）
①渡辺裕、日本近代のなかの宝塚歌劇、国際シンポジウム「戦間期(1918-1938)大阪の音楽と近代」、国際日本文化研究センター、2008.12.6
②渡辺裕、「鉄ちゃん」のサウンドスケープ―音楽の「環境化」再考、美学会東部会 2011 年度第 5 回例会、東京大学、2012.3.3

〔図書〕（計 2 件）
①渡辺裕、春秋社、考える耳再論―音楽は社会を映す、2010、155
②渡辺裕、中央公論新社、歌う国民―唱歌、校歌、うたごえ、2010、293

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
渡辺　裕（WATANABE HIROSHI）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：80167163

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：